

インターネット読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

緑の会議室

「インターネットはからっぽの洞窟」は、ハッカー追跡劇の主役となり、「カッコウはコンピュータに卵を産む」(草思社)を書いた著者の最新エッセー。人間が機械を使うのではなく、機械に使われる愚かしさを指摘、「インターネットは理想の楽園ではない」と説きます。ネット界の英雄の言葉だけに、説得力は十分。さて新登場の「緑の会議室」の判定は、(倉骨彰訳、草思社、二二〇〇円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン衰亡史」。はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

インターネットはからっぽの洞窟

C・ストール著

広瀬 √インターネット万能論への警鐘として書かれた本書ですが、その記述のスタイルがいかにインターネットそのもの。過剰な饒舌さの中に重複も矛盾も残ったままで出てくる。

橋爪 √インターネット万能論へは根拠がありません。でも、インターネットが万能でないという議論も、証拠がないと思ふ。なんだか、汽車と競走した馬車や、飛行船と飛行機の優劣論争(当時は大まじめだった)を思い出してしまいました。

橋爪 √この本を読んで考えなければならぬなと思つたのは、情報のあり方の話(インターネットは無料ではないのか)、それと、図書館(電子化に資金

とへの疑問。こんな高価な、しかも三年やそこらで旧式になってしまう機械を学校教育(それも研究機関でなく)に導入することにについては、常々疑問を抱いてました。

広瀬 √ホコリをかぶつてい

進むコンピュータ社会 つまらなさ、味気なさも

橋爪 √インターネット万能論には根拠がありません。でも、インターネットが万能でないという議論も、証拠がないと思ふ。なんだか、汽車と競走した馬車や、飛行船と飛行機の優劣論争(当時は大まじめだった)を思い出してしまいました。

小林 √二年という年月(原書刊行は九五年)はやはり長かったという感じですね。二年前

をめぐみ、本をながしつていいの(か)でした。

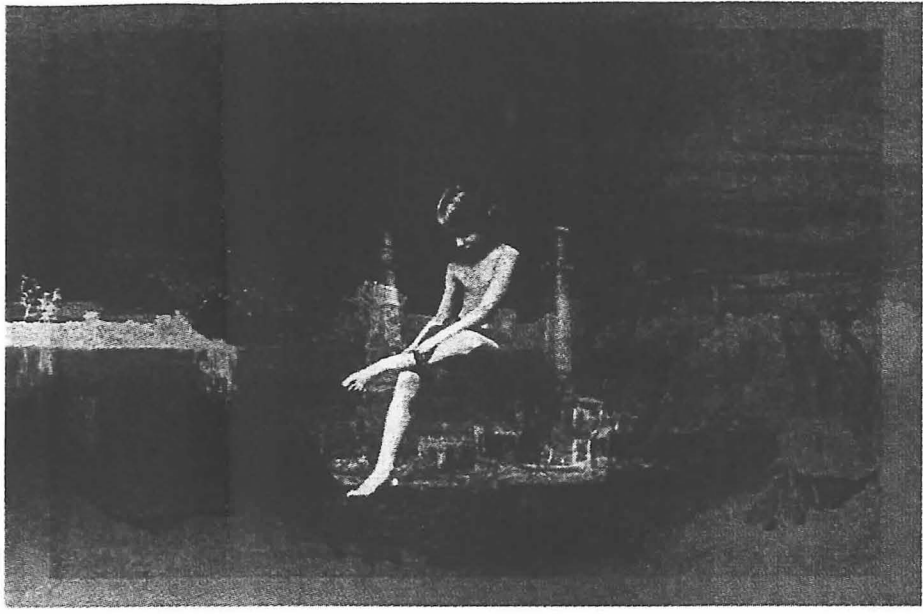
橋爪 √よしあしは別として、とにかくインターネットなしに社会が動

橋爪 √結局、ストール氏がインターネットにどう関わる人

マリィ・ルドネ著

「シルシー」(集英社)のイメージ

CGアート 浅野信二



橋爪 √私も書誌学の一応の知識はあるのですが、たしかにカード(検索)の優位はある。でも、インターネットにはインターネットの利点があるので、リズム(地下室)的な検索の構造をもつていて、誰もその全貌を管理しているわけではないという。

橋爪 √もうひとつ、この本の成り立ちに欠かさないのが、著者のカリスマ性でしょう。ハッカーは、インターネットの英

橋爪 √本書の長所をあげれば、やはりコンピュータ中心の世界のつまらなさ、あじけなさを具体的に記したところでしょう。二年前は確かにコンピュータを使って通信するということ自体がスリリングでした。まさに世間がそんな状態にあったわけで、その意味でこうした冷や水的な苦言は有効だったと思われま

小林 √共感したところも無

橋爪 √もうひとつ、この本の成り立ちに欠かさないのが、著者のカリスマ性でしょう。ハ

橋爪 √結局、ストール氏がインターネットにどう関わる人

時代小説ファンだという神奈川県相田久美さんからの書き込みです。「時代小説や歴史小説では最近大物作家が相次いで物故され、書店で追悼フェアなども行われて、読者にとっては往年のさまざまな作品を手にするのができ、なんとなくうれしいのですが」という前置きで、今、柴田錬三郎の「眠

狂四郎」シリーズを読みたくて探しているそうです。「本屋さんではあまり見かけないです。こびり伴天連と

独特なエロチシズムをたたえ、ハードボイルドなストーリーが展開される。(市川雷蔵が主演した)映画も良いですが、原作でいっぺん読んでみたいですね。「眠狂四郎」シリーズは、新潮文庫で刊行されています。あまり本屋で見かけないとしたら、注文してみるのも手です。

パノラマの世紀

(ベルナル・コマン著) 筑摩書房

来週は「青の会議室」

INTERNET マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

緑の会議室

「日本拷問刑罰史」は、日本の武具や武家文化などに詳しい著者が、古代から江戸時代までに行われた拷問・刑罰の方法について解説した一冊。理屈は一切はさまず、百近い刑罰が図入りでひたすら詳細に描かれているだけに、「どう読むか」が難しい本でもありません。現実でも生々しい事件が続く中、「緑の会議室」では「死のリアリティ」というテーマが話題になりました。(柏書房、1000円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン 衰亡史」。
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

日本拷問刑罰史

笠間 良彦著

広瀬 なんと不思議な淡々とした雰囲気が一貫している本でしたね。

小林 どのくらいのもナンですが、むしろ叙情的な印象を抱きました。

橋爪 数年前から「死体ブーム」だったわけですが、この本の執筆の意図も出版の意図も、よくわからない。昔、少し興味をもって宮武外骨の「私刑類纂」(河出書房新社)「宮武外骨著作集」4に収録)を読みました。宮武の場合は、権力が人を処罰する権利はないという強烈な自由思想のもと、自分の死体を販売する広告を出し、出す書物、書く原稿、(河出書房)発禁になりながら、私刑や刑罰について博覧な知識を追究していった。それと比べると、この本は何とも物足りない。

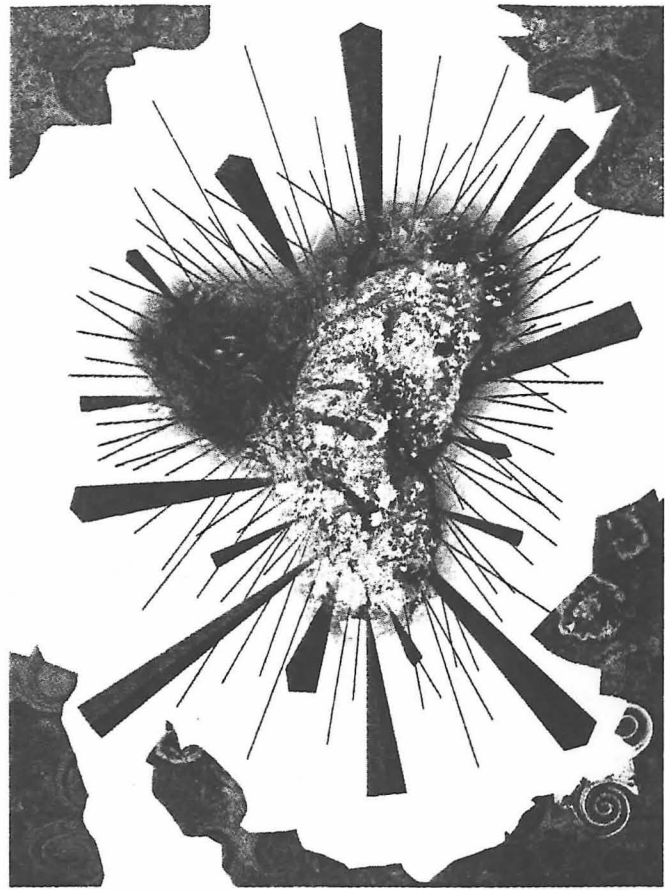
死の現実感薄い時代に 残酷なイメージ満載

小林 だが、エピソード自体は結構面白かった。ことに信長がわざわざ竹の鋸を作らせて罪人の首を挽かせたなどというあたりは

広瀬 「図説死刑全書」(原書房)のほうがかたしかに本物ですが、やはり事例に圧倒されているという点は、共通していると思う。ただ、こういう奇情な資料がいろいろあることは、役にも立ちません。

橋爪 「図説死刑全書」も「日本拷問刑罰史」もともに、HOWへの関心が、WHYやWHAT

藤川桂介著 「呪力戦記、壬申の乱」(ネスコ)文芸春秋のイメージ CGアート・奥村鞆正



小林 死の四、五年、人間の死に対する興味がこれまでになくふくれあがっている自分を感じます。個人的なことを言えば、わたしは四年前に両親を一挙に失ったのですが、あきらかにそれ以来、死について考えたり書いたりするのが好きになっています。

橋爪 死の経験から言っても、生きている人間が目の前でだんだん死体になっていくというのは、説得的です。死が瞬間であるというのは、フィクション(少なくとも制度)だと思いました。

広瀬 死のリアリティと死体のリアリティは、相当に違っています。死体は「死体ブーム」のなかでは、それを代替的に受けとめる傾向があるんじゃないでしょうか。死にリアリティを感じる方法が見失われていて、それを死体を見ることで多少だけ埋めている。

橋爪 死のリアリティとは何なのでしょう。

小林 死ってリアリティを持つものなのではないでしょうか。

橋爪 死刑といつこの普遍性を考えさせられます。たれにでも共通に訪れる苦痛と死。死刑は、それを見るものを恐怖に追い込み、ひとつの共同体に再組織する「切り札」なのかもしれません。

広瀬 人間にとつて死をイメージする道具はいつでも必要」という点には同意です。ただ、死体ブームで注目されている死体は、果たしてその道具になっているのだろうか。「切実でないから死のイメージを楽しめる」というような印象がぬぐえない。

小林 死の安易さが現代社会の品のなさでしょうか。

広瀬 被害者やその遺族の視点に近づいていくと、せめて犯人の側にも加害の過酷さに釣り合った応報がなされることで、多少ではあれ、この世の理不尽さを和らげて安心できる。死刑にはそういう社会的な側面もあるのではないのでしょうか。

橋爪 いろいろなすけろ意見でした。笠間さんの本に、こういうことが少しでも書いてあればなあ。

(4月25日の電子会議を編集しました)

今回セッションで取り上げた「日本拷問刑罰史」について、神奈川県の高橋千恵美さんの感想です。

「いつも、最近、自分の生活以外のことに刺激を求め、人が増えているように思います。死とか恐怖(じつ)ものは、生活

のなかで見え隠れするからリアリティがあるのだと、私は思っています。だから、文芸作品が面白いのだと」

原書房からは「図説死刑全

書」に続いて同じ著者の「図説自殺全書」、秋山裕美著「図説拷問全書」の「三部作」が出て話題になっていますが……。

「もちろん、刑法は重要な学問ですし、それを学ぼうとすることも重要だと思います。けれど、アプローチの仕方を間違え

てはいけないと思います。『犯罪と刑罰』(ベッカーリー著、岩波文庫)のよつな原理原則の書かれた本とあわせて読む必要があるのではないのでしょうか。

そうでないと、マニア的な好奇心だけにどまってしまうと思っています」

「図説死刑全書」(原書房)のほうがかたしかに本物ですが、やはり事例に圧倒されているという点は、共通していると思う。ただ、こういう奇情な資料がいろいろあることは、役にも立ちません。

BC!な話

来週は「書の会議室」
竹内久美子著
新潮社)です。

マルチ読書

http://www.yominet.or.jp/

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

緑の会議室

「大英帝国衰亡史」は、大國として世界に君臨した近代イギリスの衰亡のドラマ。著者の中西輝政・京大教授(国際政治学)は、あえて分析的視点を避け、「人物伝」を中心に文、明史的、精神史的な観点から成熟した大國の悲しい運命を描き出しました。「緑の会議室」では、彼が主張する英国の「貴族性」の解釈をめぐる、特に熱い議論が交わされました。(PHP研究所、一七五〇円)



大英帝国衰亡史

中西 輝政 著

橋爪 V この本で感心したのは、イギリス人の懐の深さのようなものですね。最初の「エリザベスと無敵艦隊」の章では、ランドル低地の戦略的重要性と、イギリスの基本戦略が分析してある。日本にとっての朝鮮半島のようなものでしょうが、イギリス人の場合、連立方程式を解いていく直観的な外交感覚がすばらしい。

しかし、この本のテーマは少し違ったところにあって、世界の指導的な大國を保たせる気概(人間的な要素、具体的には、リーダーと貴族と政治家の

その精神)に鍵があるという記述をしていくのは、社会科学者のなセンスだけはちよつと無理なのかなという印象も持ちました。

の精神が優れているから、衰亡するにしても美しく衰亡できることができたのだ」というような論法を使っているような気がしますが、そのところがどうも。全体としては好著の印象があります。

大國維持する気概とは カギ握る「貴族性」の解釈

小林 V 確かにイギリス人の外交の巧みさは活写されていますね。ただ、英国の衰亡原因についてはちよつと不鮮明な感じがしました。著者はアメリカの台頭を見越していたことを指摘していますが、それが主原因とは考えにくい。

話なのです。広瀬 V とはいえ、こういってスタイルで書いていて、しかも「システムではなくて人間や

小林 V 「人間やその精神」がなぜ衰亡したかという点については依然、納得できない部分があります。著者は「人間やそ

橋爪 V この本はあくまでも英国の話ですが、なぜか日本を思い起すことがわりと書いてある。著者の意図なのかもしれないが、バブル以降の衰退日本、衰退の原因を考えさせられるわけだ。

橋爪 V 著者が「貴族性」という言葉で述べようとしたのは、日本語に直すところ「頑固」とか「一徹」とかいうことかと思うのです。それは昔の「武士」にあつたと思うし、日本にない訳ではないと思う。

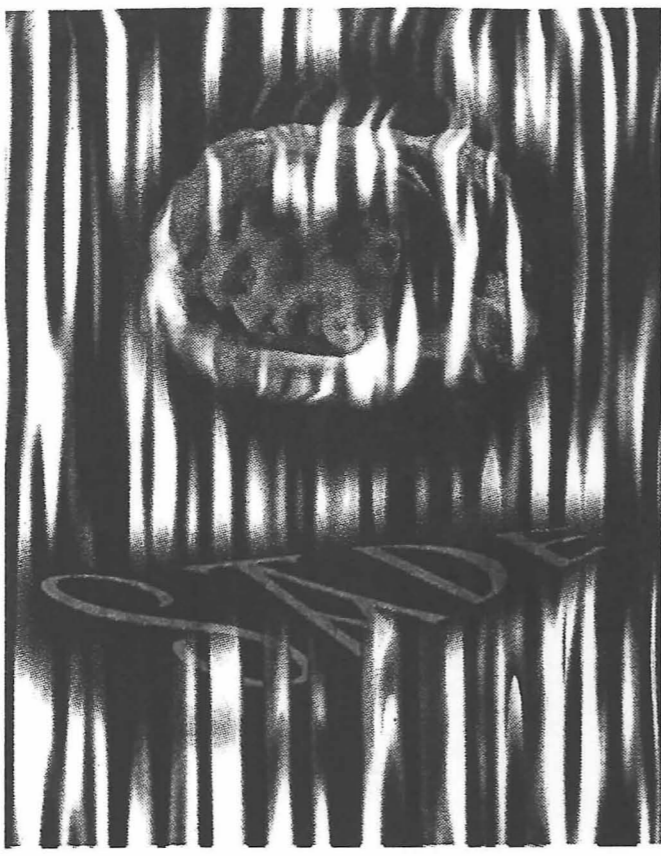
橋爪 V 衰亡の原因論は、たしかに明確でないという感じが残

マルキ・ド・サド著、佐藤晴夫訳 「ソドムの百二十日」(青土社)のイメージ CGアート=横尾忠則

小林 V チェンバレンに対する見方には新鮮なものを覚えました。彼は、弱腰でナチスを増長させてしまった人物という捉え方をされがちですが、英国には時間を稼ぐ必要があつたわけですね。その分、チャーチルへの印象も変化しました。

橋爪 V 印象に残る人物としては、著者が「異端のエリート」と評している、権力にも時代にもおもねらないウィリアム・テンブルとか、ジェームズ・ハリス、チャールズ・ゴードンといった外交官たちでしょう。日本で今日、広く知られているとはいえないが、その不屈の信念は見習うべきでしょうね。

橋爪 V 政治家は体力勝負なので、英国では若いのを大学でスカウトして育てるとか。これをやれば日本もよくなるかも。広瀬 V 「貴族」という言葉から一つみ取るとすれば、人材を育てるシステムというのは、学校とかカリキュラムとかの人為的な組織だけでは足りなくて、個人的な伝承とか遺伝といった要素が大きいのかなんてしょうね。



読書委員の広瀬克哉さんが、先日イギリス総選挙の様子を現地取材しての感想を、セッションのなかで報告してくれています。

「基本は衰退過程の調整策が続いているという印象ですね。同じ衰退過程であっても、

後半に経験した破局への雪崩を何とか回避しようとする荒療治をやったのけた、という位置づけができると思う。今はその後の調整過程にあるのではないでしょう。か。メージャー政権からブレア政権への転換は、議席の動きとしては劇的だったけれども、

英国の今後の針路にとっては決定的なものとは受けとめられていない。現地は、妙に静かな印象でした。

来週は「青の会議室」 幸田文対話 (岩波書店) ぴよ。

「基本は衰退過程の調整策が続いているという印象ですね。同じ衰退過程であっても、

活水準を安定させていくことが大切です。 サッチャーさんは、七〇年代

「基本は衰退過程の調整策が続いているという印象ですね。同じ衰退過程であっても、

「基本は衰退過程の調整策が続いているという印象ですね。同じ衰退過程であっても、

読書

緑の会議室

改正日銀法が成立し、日本版ビッグバン(金融制度の抜本改革)がいよいよ現実味を帯びてきました。真淵勝・大阪市立大学法学部助教授が書き下ろした「大蔵省はなぜ追いつめられたのか」は、戦後の自民党と大蔵省との闘争と対立の歴史を解説し、現在の日本経済を知るのに絶好の一冊。実にタイムリーな出版に「緑の会議室」でも賞辞が集まりました。(中公新書、八六〇円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン 衰亡史」。はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

大蔵省はなぜ追いつめられたのか

真淵 勝著

廣瀬 今年の三月までの政治過程を、この段階(二)までしっかりと分析して見せたという点は、まず評価したい。

橋爪 去年繰り広げられた大蔵省と連立与党との角逐。ホットな話題で、感心する人が多い。

小林 要するに政治家と官僚の癒着が、こうした怪物を作ったという意見なんですわ。歴史的経緯をきちんと言った説明には、非常に納得がいった。

廣瀬 真淵さんは一貫して大蔵省を研究してきた行政学者で、新制度論の論者です。前著「大蔵省統制の政治経済学」(中公叢書)では、財政と金融を一体として大蔵省が扱うという制度が、日本財政の国債依存を可能にした(二)という主張を

た。今回はその基本制度の枠組みに改革が及ぼしているわけですから、この本を書かずにいられなかったのではないかと橋爪 橋爪 橋爪 橋爪

た。頭にきた自民党が大蔵改革をスタートさせた、というストリーナのです。小林 大蔵省が敗北したかどうかが、という点について、

確かに金融と財政の分離はいつにか確保されたようだが、日銀の独立は(二)まで確保されたのかという点。廣瀬 日銀についてはもっと微妙な記述が必要だったと思います。

自民党との蜜月と対立 政治過程を読み解く

は案外単純です。自民単独政権時代は二人三脚が続いていた。連立になって下野した自民党を、大蔵省がすげなくあしらった。

「金融と財政の分離」及び「日銀の独立」をクリアしたから敗北だと説明しているのはわかりやすい。ただ、ひとつ疑問点は、

中田宏之著 「架想楽園へ行く(二)」(アスペクト)のイメージ CGアート 河口洋一郎

小林 金融検査監督庁の長を官僚にするか大臣にするかという問題で、結局それが官僚になるという一節がありました。こうした重要な省庁に官僚を配して務まるのでしょうか。

廣瀬 人事院や公取委のようには、政治家でないが、ある種の重みが必要な人事として扱われる(二)の方が、運用次第ではよほど独立性を発揮できると思います。

小林 ところで、本当に大蔵省は敗北したのでしょうか？ 確かに本書は冒頭に大蔵省の敗北条件に「金融と財政の分離」を掲げており、その意味では敗北したと言えます。しかし、これは結論から導いた条件であるようにも思えます。

橋爪 私理解では、七〇〜八〇年代を通じて、ケインズ型公共事業(国債発行による景気浮揚策)一本槍で来た時代がバブルを最後に終わり、古典資本主義への回帰(市場の独立と、小さな政府)が起り始めた。その日本での現れが、日銀の独立

立問題(大蔵改革(金融)と財政の分離)だと思っ。大蔵省が、頭でわかっている、組織力としてそれを承認できなかった。ついに味方を失って、組織改革を迫られた(すなわち敗北)のだと思っのです。

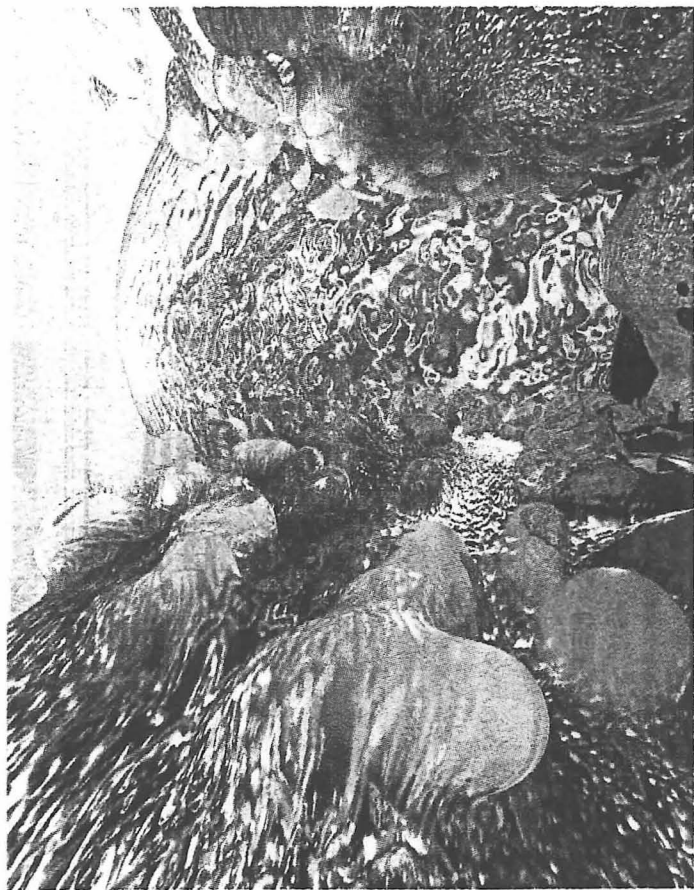
廣瀬 金融と財政の一体という基本制度の変更を強いられた程度にまで大蔵省が追いつめられたことは、確かに重大な指摘だった。でも、それは著者の言う「国家権力の所在の変更」という言葉がもつほどの大きさの問題なのかどうか。それはまったく論じられていない。

小林 文中で「国家たる大蔵省を解体するとは何事か」と叫ぶ大蔵官僚には笑いました。

廣瀬 新聞の読み方マニュアルとしても意味がある。政治欄の記事を、単に政局の動向を読むだけでなく、政策内容をめぐる選択のプロセスとして読み解くお手本を示したわけですから。

小林 粟田の「トプクター」(小学館)というマンガを読んだときも、新聞記事の意味について随分と吃驚させられました。が、今回はちょっとしたらそれ以上。

橋爪 いろいろ本の効用は一つには、これほつかうかできないぞと、官僚や政治家に思わせる効果があることです。実名入りで、誰がどう意思決定したと書かれる。(二)という書物が増えることが、日本の政治を国民の手の届くものにする早道ではないかと思っました。(6月11日の電子会議を編集しました)



神奈川県の福岡智恵子さんからのメール投書です。七十五歳になる父が、いわゆる中間小説誌の官能小説特集号(二)の二つを読みました。山本周五郎や藤沢周平のファンである謹厳実直な人です。こういう

う雑誌はこういう人が読んでいるのだろーと思っいたのでち

談話室から

か、お話も官能描写も中途半端で不満ばかり残りました。官能小説の効用の一つは、読み手を元気にすることだと思っので、父にはあわづらひでちようどいいのかもしれません(二) 確かに最近、まじめな(二)小説誌でも「ポルノ小説特集」

を時々読むことがあり、その号だけは随分売れるそうです。

文人悪食

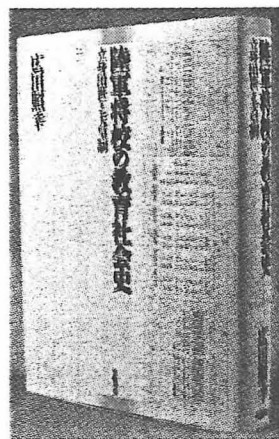
来週は「青の会議室」(嵐山光三郎著)「マガジンハウス」です。

マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

緑の会議室

昭和の戦時体制を支えたエリート集団「帝国陸軍将校」は、どのように選抜され、イデオロギー教育をいかに受容していったのか。「陸軍将校の教育社会史 立身出世と天皇制」の著者は、「教育の社会史」を専攻する一九五九年生まれの東大助教。質・量ともに「労作」の名にふさわしい一冊に、緑の会議室の三委員は十分な読みたえを感じたようです。(世織書房、五〇〇〇円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン衰亡史」。はしづめ・たいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

陸軍将校の教育社会史

広田 照幸著

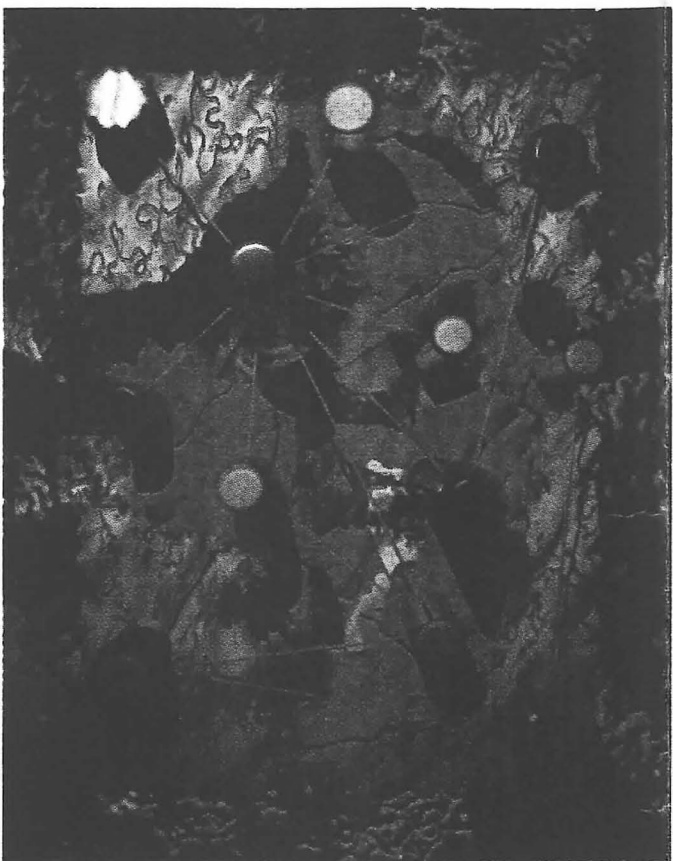
広瀬 √この本は、膨大な資料を駆使して陸軍将校の育成過程を分析しています。強烈なエリート意識と立身出世欲を持つ一方、退職後の生活の心配もした彼らを、生身の人間としてとらえ直した。教育を受ける側の目、そのたたかさを重視し、社会構造と教育現場とのリンクをしっかりととらえているので、厚みとリアリティーのある分析になっていると思います。

小林 √教育を考える場合、それを受ける側の本音は欠かせない要素ですが、これまでは無視、もしくはなまじりにされてきたと思うんです。著者は、一章を費やしてその問題に迫っている。しかも憶測ではなく、説得力のある資料によって。広瀬 √日本の軍人を対象と

「生身」の士官教育検証

初めての業績だと思います。橋爪 √従来の学説(イデオロギー注入説)を批判しつつ陸軍の幼年学校、士官学校の教育の中身を検証するという、枠組

ジュール・ウェル又著 「地底旅行」(創元SF文庫)のイメージ CGアート=金子徳明



本の将校は資産がなく生活基盤が弱かった点が改めて指摘されていて、説得的でした。小林 √第Ⅲ部の「社会集団としての陸軍将校」を読んで、

少し厚過ぎたら陸軍将校、ひいては陸軍の精神風景はもっと違ったものになったのではな

いか、と痛感しました。広瀬 √現代まで続く日本の学校教育全般についても、考え

させられます。兵卒教育について、生徒の内面をコントロールしようとしながら「行動」にその内面が反映する」という図式に陥ると、あとは表面的な行動の管理に堕してしまっ、生徒の内面に届かなくなる。そう指摘

してはいますが、著者の関心は、現代にも通じる「学校論」にまで及んでいるのだらうな、と興味深く読みました。橋爪 √ただ、結論については多少の不満を覚えます。皇国教育の成功はイデオロギー注入

に対応する主体的動機―立身出世の願望―だというのが、それだけとやや単純ではないか。著者の分析は実証的だけれど、教育を受けた将校・生徒たちの内面を本当に再構成できたかという点、心もとない。広瀬 √その不満には同感です。広田さんは、その他大勢

「最近、大きな買い物をしました」と神奈川県某の大学生、高橋千恵美さん。「百科事典と、吉川英治全集」などです。実は、百科事典を手に入れるのが、子どもの頃から

特に百科事典の存在には圧倒されてきた。あらゆることが載っているし、カラーの写真も綺麗

談話室から

と頼んだのですが、家が狭くなるし、子どもには贅沢と言われて買ってもらえませんでした。百科事典にも載っていない年齢があるというのを知ると、年齢が

最近のCD-ROMの百科事典もいくつか登場してなかなか便利ですが、一方で何十巻もある紙の百科事典に対する、あ

「タイム」誌が見た新しい日本

(「タイム」編集部著、プレジデント社)です。

来週は「青の会議室」

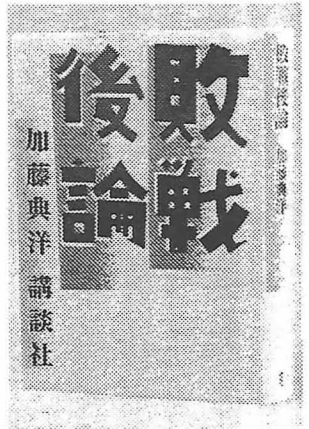
マルチ読書

http://www.yominet.or.jp/

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

緑の会議室

「敗戦後論」は、文芸評論家・加藤典洋さん、戦後五十年という時代を政治と文学の観点から斬った意欲的評論集。著者は「中」を「一押し」つけられた「平和憲法をめぐるお」じれそこのまま受け止め、「敗戦国」日本の汚れを直視せよと訴えるなど、非常に議論を呼んでいる問題作でもある。『緑の会議室』も、見事に評価と疑問が分かれたようです。(講談社、一五〇〇円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン 衰亡史」。はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

敗戦後論

加藤 典洋著

橋爪 大変な書物だと思えます。全体は三章からなり、「敗戦後論」は敗戦を敗戦として語りえなかった戦後の言論の問題。「戦後後論」は、敗戦とノンモラルの問題。「語り」の問題は、共同性と公共性の問題と、ずれながらも現在のアクチュアルな課題へと旋回しながら迫っている構造になっています。実に刺激的でした。

死者の哀悼 死者への謝罪にいたる道は可能かを問う。大変な解体作業をしてみせたという観点は同感ですが、その一方で、何が対置されているのかという

小林 大江健三郎、江藤淳の一見正対に見える戦後論を斬った上で、これを超克しないとまともな戦後論を組み立てられないとしています。正論です

言は、ひとつの言い方では歴史の主体の創出」です。別な言い方をすれば、公共性の回復。少なくとも、これまでの誰よりの問題について先のほうまで語ったと思う。「歴史形成の主体」が何かということですが、

主張をしているにもかかわらず双児のような存在として、こもに斬って捨てられています。しかし、(戦争の)実体験者としての優位性をもった人間を規範に立てられてしまうと、ちょっと比べられる人間はかなわんなどという感じがします。

「人格分裂」の戦後に 歴史主体は成立するか

広瀬 著者の主張は、次のように要約することが出来ます。日本人は「国民」としての主体を形成できていない、いわば人格分裂にある。それを克服してはじめて「歴史形成の主体」となるが、そのためにまず自国の戦争死者を深く哀悼し、その哀悼を通じてアジアの

島田雅彦著 「夢使い」(講談社)のイメージ CGアート・奥村 靱正

点がなかなか伝わってこないといつも感じ、苛立ちを感しました。 橋爪 何が見えてくるかと

と「あえず」そういって(歴史)をきつんと考えてゆける自分が必要だろうと思う。

小林 確かに、それを具体的にどう遂行してゆくかというところ、ちょっと雲をつかむような感じがしました。

橋爪 具体的な何をやればよいか。私の考えですが、(一)さきの戦争の侵略的な本質について、外国の非難を十分に理解し認める、そのうえで(二)その戦争を担った父祖に向かって日本という国の共同性、ならびに公共性を守るため命を捧げた事実を哀悼の意を表する、ということではないでしょうか。言い換えれば、靖国神社の問題を、憲法の原則によってなんとか解決するということだと思います。

橋爪 具体的な何をやればよいか。私の考えですが、(一)さきの戦争の侵略的な本質について、外国の非難を十分に理解し認める、そのうえで(二)その戦争を担った父祖に向かって日本という国の共同性、ならびに公共性を守るため命を捧げた事実を哀悼の意を表する、ということではないでしょうか。言い換えれば、靖国神社の問題を、憲法の原則によってなんとか解決するということだと思います。

小林 本書では、大岡昇平にある種の特権的な地位が与えられているように思います。その理由は「敗北を敗北として認め得た」からです。そして彼の対比において、大江は汚れを拒否した人間として批判的に描かれ、江藤も大江とは正反対の

は、そういいたくない。(中略) それなのに、日本の社会は、戦後五十年を過ぎて、もう「なっていない」と書いています。戦後という時代を考える上で、加藤さんの投げた石はまだまた波紋を広げそうですが、裏面ある論争を期待したいものです。

広瀬 二では第二章の太宰論はどうでしょうか。こちらは太岡のような特権性をもたない。小林 太宰治論は、わたしにはよくわかりませんでした。加藤氏は太宰も「ノンモラル」の感があると言っており、実際にその通りですが、大岡、大江、江藤に対するシャープな分析に比べると、ひとと来なかった。



小林 文芸評論家の間で、近頃とみに戦後研究が盛んなのは事実です。現在の批評に、い、しかも衰退局面にあると思われる文学を語るより、戦後という時代を批評する方がはるかに面白いでしょうね。

来週は「青の会議室」 夢ワイン (江川卓著 講談社)です。

「敗戦後論」の元になった論文は九五年から文芸誌に発表された。戦争責任の取り方をめぐって、哲学者や文学者の間で論争を巻き起こしました。いわゆる旧改憲派、旧護憲派がともに戦後の「ねじれ」を受け止めていない。同じだと指

摘したからですが、著者加藤さんの意図は、歴史や国民を語るることにあるようです。著者はあながち「現在の日本社会にすんでいる人で、この社会がもう少し風通しのよい社会になればいい、また、他国の住民との関係でももう少しまっとうな責任を果たす社会が実現されればいい、と思わない人

「夢ワイン」 (江川卓著 講談社)です。

「夢ワイン」 (江川卓著 講談社)です。

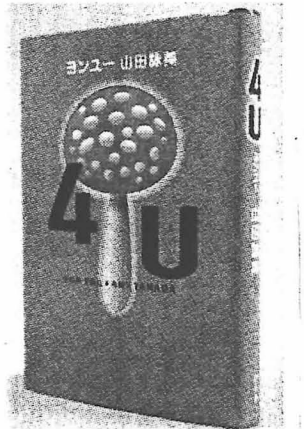
「夢ワイン」 (江川卓著 講談社)です。

マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

緑の会議室

「4U(ヨンユー)」は、若い読者の圧倒的支持を集める作家・山田詠美さんの最新短編集。私のラプストリーは、いつだって振り向いてくれる人のためにある」と語る著者が、恋という人間関係のケミストリー(化学反応)を九つの作品のうちに描きます。その世界はあくまでクールで鮮烈。さて、「緑の会議室」のメンバーに、その「特効薬」の効き目は？ (幻冬舎、1800円)



山田 詠美著

こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン衰亡史」。
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

4U

小林 √表題作「4U」のよ
うないわゆる、詠美節の作品
から、「紅差し指」のような社
会派ドラマ的なもので、とこ
かく作品の幅が広い。文体もか
なり幅がありますね。「トラッ
ッシュ」(文春文庫)のように長
い文章で綴った作品もあれば、
デビュー作「ベッドタイムアイ
ズ」(新潮文庫)を思わせるワ
ンセンテンスを極度に切り詰め
た作品もある。全体に淡色とい
う感じですが、悪くない。

余裕を持って読める。
橋爪 √ケミストリー(男女
の不思議な出会い、恋の化学反
応)をテーマにした作品集とい
うことですが、それなりに不思議な
プロセスがあるという感じがし

論じている部分がありますが、
実際にあんなスタイルの会話が
なりたつのか。現実味が乏しい。
小林 √この作品集はあんなに
模索の過程にあるという感じがし

念を感じました。男が自分の語
彙の少なさを嘆く。めづみは、
自分の男を形容するのに百個ぐ
らいの言葉を使う。自分も、せ
めて、二十個くらいは欲しいな
あ、と思った(眠りの材料)。
また、愛とセックスは別々で、

印象が強すぎるのですが、結構
こまめに新しい世界を開拓して
るんですね。「トラッシュ」
では饒舌な文体をものにしたし、
「放課後の音符」(新潮文庫
・角川文庫)では新しい少女小
説の可能性を出してきた。今回
はまだそれが形になってないよ
うな気がしますが、これから先
が楽しみです。

恋の化学反応を描いて 新たな魅力と広がり

広瀬 √著者の本は「ベッド
タイムアイズ」熱帯安楽椅子」
(集英社文庫)に引いて三冊目
ですが、これまでのものと感じ
が随分違うな、という印象がし
た。皮膚感覚を全開にして疾走
するよりに読むと、強い初期の
期の作品とは打って変わって、

議論な出会いの数々が描かれてい
て楽しめました。ただ、表題作
で、三人の女たちが、あけすけ
にセックスや男たちのことを議

ます。しかし、模索しながらも
作品のレベルを落としていない
ところはさすが。
橋爪 √言葉に対する尊敬の

本気でまじめに愛しているから
といって、ほかの相手とセック
スしないわけではない。その割
り切りはむしろ倫理的な感じさ
えします。

広瀬 √小林さんから見ると、
この作品集はいろいろな模
索しつつ、次にどこへ行くのか
探っている。



マイクル・クライトン著
「スフィア―球体―」(ハヤカワ文庫)のイメージ
CGアート=金子徳明

広瀬 √山田詠美の作品世界
は、基本的に男女の対一の関
係からすべてが見られているこ
う印象だったんですが、今回
は、そうでない広がりを感じ
て書かれたものがあって魅力
を感じました。とくに「メサイア
のレイン」。

小林 √この作家はあんなに
切りのよい文章、魅力的です。
小林 √皮膚感覚を売り物に
している書き手が多くいます
が、彼女の場合、皮膚感覚とい
うより、皮膚そのものでしょう
ね。そして皮膚からいわゆる皮
膚感覚的なものへの演繹を拒否
するようになっています。彼女
の潔さはそのあたりにあると思
います。



広瀬 √なるほど、だからこ
そウェットにならないで、直接
的でデュオな世界を描けるん
でしょう。そこからどうやって
対一を脱した世界まで広がって
いけるかですね。

小林 √山田詠美はこの小説
集で、自分の皮膚を、船出、さ
せたかったのではないでしょ
うか。うん、それが結論に近い
と思います。



小林 √彼女がデビュー作の
取り上げていきます。

来週は「青の会議室」
グリーン・マイル
S・キング著
新潮文庫です。

「談話室」への参加の仕方が
わからない、という声が多いよ
うですよ。ミニネットの談話室
には、現在のところ会員登録が直
接書き込むことはできません
が、電子メールやファクスは、だ
きなどでの投書も大歓迎です。
電子メールのアドレスは ash

18552@yominet.or.jp フ
マックス番号は03・3779・6
4800、はがきなどのあて先は
東京都千代田区大手町一の七の
一、読売新聞文化部「マルチ読

談話室から

書」係。ぜひこのページの感
想や会議への意見、これから取
り上げてほしい本、最近読んだ
本の感想などを寄せ下さい。
いただいた投書は、「談話室」
に可能な限り転載していきます。
パソコンをお持ちでない方
のご意見も、今後はできるだけ

ミニネットの「マルチ読書」電子
会議は読むことができます。I
Dとパスワードを聞いてきた
ら、いずれも「Guest」と
半角小文字で入力してください。

グリーン・マイル

S・キング著
新潮文庫です。

マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

緑の会議室

「戦艦大和誕生」は、大和建造に船殻主任として参加した西島亮一・元海軍技術大佐(故人)の手記を元に、造船大国・日本の出発点としての軍艦造船史を描くノンフィクション。西島氏は、軍艦造りに初めて近代的生産管理システムを導入した人物。「緑の会議室」のメンバーは、戦争というむなしさの中での地道な技術屋の闘いに、改めて感銘を受けたようです。講談社、上下各1000円



前問 孝則著

作 せ 七 家。57年生まれ。作品に「ウサガーデン 衰亡史」。
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

戦艦大和誕生

広瀬 〱タイトルからは、大和の設計や大艦巨砲主義などの戦略面をつい連想してしまいがちだが、この本の特徴は、大和を作った造船技術に光を当てたところ。工数を管理し、いかに納期を守り、コストを安く上げるのか。戦後の造船業にも通じた生産技術が海軍造船の世界の中でのように形成され、その限界がなんだったのかを語っています。

橋爪 〱上下巻で、冗長と言えは冗長。散漫と言えは散漫。しかし、描かれているのはまぎれもない、半世紀あまりまえの日本の姿。ひとことでは思えず読み進むうちに、高度国防国家日本のかつてのリアリティにわが身が包まれていく感じがします。人間と組織と科学技術が結

た。この中で本書が新しいのは、西島亮一という造船官にスポットをあてたことです。設計主任でなく、船殻主任にスポットをあてた。技術的な困難を解決しよう。西島氏が知恵を絞るあたりは、専門的な事柄であるにもかかわらず、いきなりつけられる。

広瀬 〱ただ、読んだ甲斐はあったと思うものの、作品構成としては失敗作ではないかとも思います。著者は、西島造船官のかかわった仕事を時系列的に淡々と紹介しながら、関連した話題も取りあげるとい書き方

「世界最大」を実現した 生産現場の「技術者魂」

あてたところは慧眼。面白かったのは、やはり「大和」製作の雰囲気やナマで伝わってくる七章(前代未聞の複雑な巨大戦艦)八章(「大和」進水)あたりで

をしている。面白い素材を、ながながと楽しませてもらったのに、いまひとつ焦点がどこにあったのか、メッセージの伝わりが弱いのです。

小林 〱そうですね。残念なことには、西島氏の像がいまいち浮かびあがってこない。本書の構造から言えは、生産技術という感情移入しにくいものものひとつの象徴として西島氏をもってきたわけですから、少なくとも本書の主題が焦点を結ぶべきらしいの人物的な強度を与えないと、本書自体が成り立ち得ないと思うのです。

網野善彦 他編

「天の橋

地の橋(福音館書店)のイメージ

CGアート 奥村鞞正



橋爪 〱テーマが絞られていないのはその通り。しかし著者が発掘したのは、設計や用兵でなく生産の現場。軍艦をいかにつくるかという、その一点だったと私は思うのです。当時、軍艦は最先端の兵器でした。陸軍に比べても、装置(兵器)に依存する割合がきわめて高い。そして、軍艦は、設計数学と材料工学の巨大な塊だったわけですから。軍艦をつくる側からの、生産管理のテーマは十分に描けて

小林 〱鋭い指摘だと思います。ちょっとこの部分、著者は背伸びしている感じがします。広瀬 〱地味だけれども死活的な軍艦技術の話。本書が取りあげた生産技術というのは、そういうものだったといえます。そこには、戦争、あるいは経済競争といった表に出る結果を支える世界のリアリティが読みとれる。

橋爪 〱ちなみに、こういう技術者魂がなくなったら、日本はもう終わりですね。(10月13日の電子会議を編集しました)

談話室から

〱この欄で山本武臣さんの小説「あじさいになった男」(コスモヒルズ)を紹介したところ、多数の反響が。「題名にも引かれましたが、読み始めたらもう止まらず、一気に読みあげてしまいました。最近のアジサイブームの陰には、いろいろと研究

を重ねてこられた偉大な研究家がいらっしやうからだと感じがしました。たまた残念でならないのは、出版の時期が秋たというところ」と、神奈川県 鈴木美

智子さんのお便り。「私も植物が好きで、たまたま書店で見て面白そうなので買って読みましたが、深い感動をおぼえました。こういう小説は他にないと思いました。植物の中にいりこんだ人しか書けない内容で、やはり初めての「植物

小説」として問題作」とは、東京都の岡田道子さん。そのほか、群馬県の高瀬幸子さん、東京都の秋田宏さんから推薦のお便りが来ています。ご期待ください。近く、この本を電子会議で取り上げる予定です。

死者のホンネ

来週は「青の会議室」(梅森元弘、主婦の友社)だ。

マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

緑の会議室

日本の風俗観光を訪れたアメリカ人青年が、夜の歌舞伎町で巻き起こす惨劇……。常に時代の先端をゆく作家・村上龍の最新長編は、新聞連載時から大反響を呼んだ問題作。日本社会の共同体の崩壊速度に、果たして小説は追いつけるのか。「緑の会議室」のメンバーは、「アメリカから来た殺人者」の意味に迫ります。(読売新聞社、一五〇〇円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン衰亡史」。
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

インザ・ミソスープ

村上龍著

小林 √怖い小説です。殊に前半の、なかなかわからないけど、主人公にまがまがしい予感がつのつてくるシーンは秀逸。あと、さすがに文章がいい。村上龍の文章には、もっとも凡庸な部分をとりだしてさへ、村上龍独特のオーラが漂っている。

いパアの男女の描写は、あまりにもステレオタイプだし。主人公のケンジはあくまでも狂言まわしで、唯一存在感のある登場人物は、殺人鬼のフランク。し

のかもしれないという暗喩(?)を描いた小説もめずらしいかもしれない。
広瀬 √この作品を分りにくくしているのは、「異界」

ことです。最後にフランクが自らの生い立ちについて語りますが、これが説得力があるというほどでもない一方で、まったく理解不能な異界といった距離を感じさせるほどでもない。
小林 √ただ弁護するとすれ

異界からの殺人鬼は日本の現実への懲罰か

小説というところ、たゞは「コインロッカー・ベイビーズ」(講談社文庫)のように、理由ある暴力、暴力へといならずにはいられない切実さのある作品、という印象がありました。この小説の暴力は、それとは違つた。橋爪 √つかみどころのない小説ですねえ。殺さるお見合

かし彼は異界の怪人で、ケンジの理解を絶している。これほど交流を拒否した、絶望的なコミニケーション状況(暴力)によってしか、互いにつながらない

を「異界」として突き放してしまおうとしたのが、異界の内側からそれなりに理解できるような説明してみようとしたのか、はつきりしていないという

ば、フランクを理解不能の怪物とした場合、小説の底が見えてしまふんですね。確かに怖がらせることはできて、ただそれだけの物語になってしまふ。
橋爪 √この小説のもつ意味を考えると、やはり日米関係を考へてしまふ。援助交際やバブル狂騒、構造腐敗など、日本社会の無規範が極まったところで、アメリカから懲罰のための殺人鬼が送り込まれてくる。ただし彼は、フランクシシュター

の怪人のようにとりつくとしまもない存在です。それをアチンドとつ、風俗世界めぐりをしているケンジは、ちょうど村上氏が日本社会に対してとつている位置と重なる。お見合いパブで殺されるオヤジやバーテンダーや「ギヤル」のなりそこないに対する凶暴な殺意は、本来は筆者のものであるはず。
小林 √わたしは基本的に小説はそういう読み方はしないのですが、村上龍に関してはまったくその通りだと思ひます。わたしが強く感じたことは「フランクがアメリカ人以外ならこの



「インザ・ミソスープ」のイメージ CGアート 浅野信二

は、北村薫「スキップ」「ターン」(以上、新潮社)、浅田次郎「地下鉄(メトロ)に乗って」(徳間文庫)、広瀬正「マイナス・ゼロ」(集英社文庫)をおすすめします。いずれも、時間テーマのロマンチックな佳作です。
小林 √わたしは基本的に小説はそういう読み方はしないのですが、村上龍に関してはまったくその通りだと思ひます。わたしが強く感じたことは「フランクがアメリカ人以外ならこの

最近、直接の書き込みよりもはがきや封筒による投書が多いのですが、東京都の宮城眞千子さんからののが多いです。
「自分の人生がもう一度やり直せることができたなら……こんな夢を見せてくれるのがケン・グリムウッドの『リプレイ』(新

談話室から

潮文庫)四十三歳で心臓発作で死んだジェフは、大学生のころの自分よみがえり、前とは別の人生を生きて。そして魂の底から愛する女性との出会い。S

Fでありロマンチックでもある。終幕の主人公たちの切ない思いと未来への望みに私の胸も熱くなった。そしてもし、若い頃にもどりの人生がやりなおせるなら……この思いをはせるのはきつと私だけではないはず」
「リプレイ」に感動した人に

あじろいになった男

(山本武臣著)「コスモビルズ」です。

来週は「青の会議室」

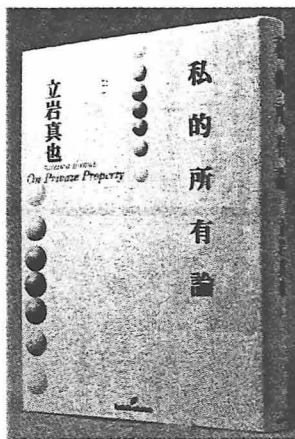
11月3日の電子会議を編集しました

マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

緑の会議室

臓器移植、代理出産、障害者問題、優生学……これらの問題を貫く「私が所有し、自己決定できる」という問い。「私的所有論」は、気鋭の社会学者が、生命倫理という最も「言葉にできない」「感覚的な問題」について、根柢から論じている。一冊。「緑の会議室」は、この試みに賛辞を送りながらも、改めて問題の困難さを痛感したものです。(勤草書房、六〇〇〇円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン衰亡史」。
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

私的所有論

立岩 真也著

だうい言えます。

小林 √身体において「私」のものとは何かというきわめて本質的な問題を、臓器移植という現代的な問題から論じる視点が斬新です。例えば、臓器がその人のものだとすれば、同意の上での譲渡や交換が通常認められないのはなぜか。代理出産の契約が、全面的によして認められないのはなぜか。出生前の選択的中絶(人工妊娠中絶)は本当に正当化できるのか。自分の肉体について、自己決定がそのまま認められないのはなぜなのか。

た文獻のデータベース、具体的な事件その他の関連した話題についてのノートなどが公開されています。

小林 √ある意味で、作者は既成の哲学用語の通用しないところにいるのですから。しかし、文章は非常に読みやすかった。広瀬 √論理化されていらない、いわゆる世間常識的な判断

移植・代理母への抵抗感 合理的説明の難しさ

橋爪 √著者がこの問題にか

けた思索の密度と重量からすると、この分量(本文四四五頁)も当然と思えます。

命・人間・社会」についてのホ

橋爪 √本書の論は、問題の

まわりをゆぐる螺旋のまわりのまわりを結ぶ。結論を導くよりもゆるやかな問題のつながるようになっている。この文が選ばれた必然性は、障書を持ったり、生命と権利のぼやも苦しんでいる人びとに届く言葉を、あえてぼんとゼロの地点から模索するため

橋爪 √本書の特色は、よくも悪くも、思索が自己流な点だと思つて。たゞは本書の中心概念である「所有」というタームは、近代法での定義とは異なる。ただ「自分が操作できる」という意味として語られる。その詰めの甘さは不満です。

広瀬 √たとえば、自分が制御できないもの「他者」という言葉が相当重要な位置を占める概念として登場します。その言葉が意味するものについて、何となく感覚では納得できるのですが。

橋爪 √「他者」の問題は、哲学や社会学では、相当な関心をもち語られてきたテーマです。しかし、本書の到達点は、存外単純な見取りとも言える。「所有とはあるものを自分の自由にする」と。しかし、実は人間には自分が決定も制御



メアリー・ホワイト著

「ぼくの中のぼく」(評論社)のイメージ

CGアート・河口洋一郎

「マルチ読書の電子会議は、

だいたい、紙面掲載の約一週間前にヨミネット上で行われます。年内の予定は、きょう八日午後八時から「赤の会議室」で、テーマ本は、東海林さなお著の「ぼくへ行進曲」(文芸春秋)。

の会議室」で、テーマ本は「JIS漢字字典」芝野耕司編著、ヨミネットの電子会議および過去の会議のログは、ヨミネット会

談話室から

日本規格協会)です。ヨミネットの電子会議および過去の会議のログは、ヨミネット会

この「談話室から」への投書は、電子ボードへの直接書き込みのほか、電子メール、はがき、封書、ファクスでも受け付けています。希望の多い本はできるだけ取り上げていく予定です。テーマ本の推薦を含めて、幅広く意見をお待ちしています。

(11月21日の電子会議を編集しました)

来週は「青の会議室」

三浦和義事件

(島田荘司著 角川書店) p.40.